

〔学術論文〕

明治大正期における中等農業学校卒業者の  
台湾への就職

－大分県農学校を中心にして－

Employment in Taiwan of Secondary Agricultural School Graduates in the Meiji  
Taisho Period : Focusing on Oita-ken Agricultural School

やまだ あつし

Atsushi YAMADA

---

*Studies in Humanities and Cultures*

---

No. 28

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 28号

2017年7月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY

NAGOYA JAPAN

JULY 2017

〔学術論文〕

## 明治大正期における中等農業学校卒業生の台湾への就職

—大分県農学校を中心にして—

### Employment in Taiwan of Secondary Agricultural School Graduates in the Meiji Taisho Period : Focusing on Oita-ken Agricultural School

やまだ あつし

YAMADA, Atsushi

はじめに

1. 大分県農学校とはどのような学校か
2. 大分県農学校卒業生と植民地
3. 大分県農学校卒業生の台湾でのネットワーク

おわりに

**要旨** 本論は大分県農学校卒業生の台湾での就職状況を概観しながら、日本統治前半の台湾における日本人社会の形成、特に官民の中下級技術者たちの台湾赴任とその後の動きを考察したものである。大分県農学校は、九州でも有数の中等農業学校であり、教諭にも学歴の高い人が多く、政争のごたごたにも関わらず大分へそして台湾や朝鮮へと農業人材を送り出し続けていた。台湾での送り出し先は総督府とその関係機関だけでなく民間企業にも及んでおり、日本統治期の農業分野における中下級技術者層の重要な供給源の一つとなっていた。その過半は1930年になっても台湾に留まり、長期間の技術指導等を行っていた。

**キーワード**：明治大正期、台湾、大分県、農学校、就職、農業

はじめに

本論は、筆者が収集した『大分県立三重農学校卒業生名簿』<sup>1</sup>と大分県立農学校校友会『校友会雑誌』<sup>2</sup>を利用し、大分県農学校<sup>3</sup>卒業生の台湾での就職状況を概観しながら、日本統治前半の台湾における日本人社会の形成、特に官民の中下級技術者たちの台湾赴任とその後の動きについて、初步的な考察を行うものである。

<sup>1</sup> 大分県立図書館に1926年版と1930年版と1937年版が所蔵されている。詳しくは第2章参照。

<sup>2</sup> 第18号（1917年）は筆者所蔵。第38号（1933年）は大分県立三重農学校校友会の発行で、大分県立図書館に所蔵されているが、台湾支部など本論に関連する記事は掲載されていない。

<sup>3</sup> 校名が注1や注2の校名と違う理由は、第1章で後述。

「農業台湾」は、日本統治時代台湾の社会経済の特徴を指す言葉として、当時から今日までよく使われている。その「農業台湾」を現場でリードした技師（高級技術者）たちに札幌農学校<sup>4</sup>出身者が多いことは、呉文星<sup>5</sup>や山本美穂子<sup>6</sup>の研究により知られている。しかしながら札幌農学校が統治50年間に延200名近い卒業生を台湾に送り込んだと言っても、それで台湾の農業技術者を充足できたわけではない。札幌農学校と並んで日本の高等農業教育機関であった駒場農学校（後に東京帝国大学農学部を経て、東京大学農学部）からも台湾へ卒業生を送り込んだけれども、これに加えても足りない。他にどのような人材が「農業台湾」を支えたであろうか。特に『総督府職員録』には氏名が掲載されず、『台湾総督府公文類纂』を探しても履歴書が出てこない、民間の人材はどこから供給されただろうか。

1920年代以降についていえば、高等農林学校卒業生や台湾での人材育成が手掛かりとなろう。帝国大学に次ぐ高等農業教育機関として盛岡高等農林学校（1902年設立、今の岩手大学農学部）を先頭に、日本各地に高等農林学校が設立された<sup>7</sup>。特に盛岡の次に設立された鹿児島高等農林学校（1908年設立、今の鹿児島大学農学部）は「熱帯農業研究」を設立の主眼とし、台湾にも人材を送り込んでいた。台湾での高等農業教育も1919年になると台湾総督府農林専門学校（台湾総督府高等農林学校、台北帝国大学農林専門部、台湾総督府台中高等農林学校、台湾省立農学院、台湾省立中興大学を経て、国立中興大学）の設立により開始され、さらに台北帝国大学理農学部の設立が続いた。

とはいえこれら高等農業教育機関の人材が台湾に供給されなかった統治初期から児玉後藤時期、特に中下級技術者（技手、雇）にはどこから台湾に人が送り込まれていたであろうか。筆者はその人材供給源として、農学校や実業学校のような中等農業教育を担った学校の卒業生に着目している。筆者は先に「1900年代台湾農政への熊本農業学校の関与」<sup>8</sup>で熊本農業学校（現・県立熊本農業高校）が、統治50年間の間に台湾へ何人の卒業生を送り込んだかと紹介するとともに、同校では学生だけでなく札幌農学校出身の教諭たちもまた台湾へと赴任したことを明らかにした。また「札幌農学校からの中等農業学校への就職について——台湾への技術者送り出し経路という観点から」<sup>9</sup>（以下「就職について」と略す）では、熊本農業学校以外にも九州には複数の中等農業学校が台湾へと少なくない卒業生を送り込んでいることと、1910年代には熊本農業学校以外にも札幌農学校出身の中等農業学校校長や教諭が台湾総督府殖産局に技師として赴任したことを明らかにした。特に校長を経験してから台湾に赴任した小川運平や長崎常、さらに山田秀雄は、1910年代台湾農政の重要人物でもあった。

<sup>4</sup> 1907年から東北帝国大学農科大学となり、1918年から北海道帝国大学。戦後は北海道大学となる。ただし本論は煩雑を避けるため1907年以降も札幌農学校と呼称する。

<sup>5</sup> 呉文星「台湾社会と日本札幌農学校と台湾近代農学の展開」（中京大学社会科学研究所台湾史部会編『日本統治下台湾の支配と展開』、2004年）。

<sup>6</sup> 山本美穂子「台湾へ渡った北大農学部卒業生たち」（『北海道大学大学文書館年報 第6号』、2011年3月31日、15～41頁）。

<sup>7</sup> 日本本国の高等農林学校は、宇都宮高等農林学校が宇都宮大学農学部、鳥取高等農林学校が鳥取大学農学部というように、戦後の学制改革で全て大学農学部へと昇格した。

<sup>8</sup> 名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』第18号、2012年12月、223-234頁。

<sup>9</sup> 台湾史研究会『現代台湾研究』45号、2014年11月、19-34頁。

本論は「就職について」執筆後に入手した大分県農学校に関する各種文献から、「就職について」では明らかにできなかった大分県農学校卒業生の台湾就職の概要、卒業生の中で何%が台湾へ行き、『大分県立三重農業高校 創立 70 周年記念誌』<sup>10</sup>で紹介された末永仁（磯栄吉とともに蓬莱米を開発）以外に、どのような人物が台湾で活躍したのかを明らかにするものである。また断片ではあるが、1910 年代大分県農学校同窓会の活動状況資料も入手したので、彼ら卒業生の台湾での繋がりについても若干の指摘を試みたい。

図 1：大分県と県内における農学校の位置



<sup>10</sup> 大分県立三重農業高校発行、1963 年 11 月 20 日。なお本誌はページ番号がない。所蔵機関は大分県立図書館。これは「就職について」でも利用した。

## 1. 大分県農学校とはどのような学校か

大分県農学校は、1893年に大分県南部の海岸沿いにある北海部郡臼杵町（現・臼杵市）で設立された<sup>11</sup>。大分県で最初、日本でも7番目の中等農業教育を施す学校であった。学科は農学科と水産学科が設置された。1894年に県立に移管されるとともに獣医科<sup>12</sup>が設置され、農・獣医・水産の3科となった（他に別科を置いた年もある）。この体制で1899年の実業学校令の施行を迎える。1901年には大分県立農学校と改称されている。同じく1901年には大分県日田郡日田町（現・日田市）に林科・蚕業科を有する大分県立農林学校が設置され（初代校長は「はじめに」で紹介した小川運平）、大分県は農林水産に関する中等教育機関を一通り揃えたこととなった。

ただその後の道のりは平坦ではない。1903年に大分県立農学校は、県中央部の速見郡石垣村（現・別府市）へと移転、さらに1917年に県南西山間部の大野郡三重町（現・豊後大野市）への移転を決定し、1919年に移転を終えている。1910年代から1920年代前半にかけては、大分県各地で中等教育機関（旧制）中学校、高等女学校、実業学校）が設置された時期である。農学校においても大分県立農学校と同等の農学校が（既存の程度の低い乙種農学校を改組して）、県北部に大分県立四日市農学校（現・大分県立宇佐産業科学高等学校）、県東部に大分県国東農学校（大分県立国東農工高等学校を経て、2008年廃校）、県中西山間部に大分県立玖珠農学校（大分県立農業高校を経て、2008年廃校）としてそれぞれ設置された。その中で農学校の2度の移転であった。江戸時代に小藩が多かったことに起因する県内各地域間の競争、そして県内の政争に影響された<sup>13</sup>。1923年には大分県立三重農学校と改称している。また学科も、1913年に水産科を廃止し、獣医科も1915年から畜産科と改称した後、1925年が最後の募集となって1929年に廃止された<sup>14</sup>。このように大分県農学校は、大分県唯一にして3学科を揃えた農業教育機関から大分県南西山間部の農業教育を分担する学校へと変質していった。なお戦後は1953年に大分県立三重農業高校となって、大分県南西山間部の農業教育を継続して分担し続けるが、大分県の高校統廃合政策の一環としての大分県立三重総合高校の開校（2006年）により学生募集が停止され、2008年廃校となった。

では大分県農学校の教師はどうであったか。大分県は政争の激しい地であり、その影響は学校現場にまで及んでいた。元教諭で校長事務取扱も務めた小山三平（1923年から1948年まで25年間

<sup>11</sup> 大分県農学校の1993年までの沿革は全て、大分県立三重農業高等学校『創立100周年記念誌』（同校、1993年）10-13頁による。本誌は大分県立図書館所蔵。

<sup>12</sup> （旧）獣医師法（大正15（1926）年法律第53号）が施行されるまで、獣医科卒業生は無試験で獣医師免許を得ることができ、獣医科は今日の大学獣医学部並の価値があった。

<sup>13</sup> 小山三平「思い出のまま」（大分県立三重農業高等学校『創立90周年記念』、同校、1983年、13-14頁、本誌は大分県立図書館所蔵）は移転について「大正7年政争の結果三重町に移転」と断言している。また『大分県立三重農業高校 創立70周年記念誌』の「七十年の歩み」を語るという座談会では、小野雅敏（1932年卒）が以下の通り証言している。

父が政党に関係していたので聞き覚えています。当時は憲政と政友二派に別れていた時で「三重町挙げて憲政に入らねば県立農学校は三重にはやらない」ということで時の町長さんが首頭をとって入党手続をしてこちらに引張ったということです。

<sup>14</sup> 「虐げられる農学校あはれ滅びゆく姿 古い歴史をふり返つて 畜産科廃止に深い感慨」（『大分新聞』1928年12月10日、夕刊3面）では、畜産科（旧・獣医科）の廃止理由を、県の財政ひっ迫としている。なお戦時体制による獣医不足に対応し、1941年に獣医畜産科として再設置された（1946年からは畜産科に再変更）。

勤務）が記す「思い出のまま」<sup>15</sup>は、第6代校長が学内不祥事で辞任、第7代校長は政争で嫌気がさして1年で辞任、第8代校長は政党に睨まれて1年で左遷と、短期間で校長が交代した事態、さらに第9代校長が温厚なため学力が低い（生徒から笑われるほどの）劣等教師を政党から押し付けられた等を、赤裸々書き綴っている。

とはいえ、大分県農学校にも優れた教師はいた。1906年に卒業した小野新市は、以下のように小島喜作（第4代校長、任1900年4月～1913年6月）と生駒藤太郎（獣医科主任教諭、1910年まで在職<sup>16</sup>）を称えている。

### 恩師の思い出

学徳共に高く卒業生全部から敬慕された小島喜作校長、獣医科主任教諭生駒藤太郎先生につき一言述べさせていただきます。

小島校長は徳川直参の武士の家に生まれ気骨凌々たる反面生徒に対しては常に慈顔を以って接し卒業生の就職には懇切を極めた。僕等の今日あるは全く先生のお蔭である。先生は明治32年より大正の始めにわたり新領土台湾の農業教育勃興期に当り母校卒業生百数十名を台湾に送った。台湾の農政の第一線に働く甲種農学校卒業生二百数十名中半数は母校卒業生で占めていた。小島校長は台湾総督府殖産局長新渡戸稲造博士、横山農務課長、藤根農事試験場長と札幌農学校の同期生であった関係と、先生の推薦した卒業生がよく働き台湾農業首脳部の信頼を得たことに基因する。また当時獣医科主任生駒藤太郎先生は駒場農大の勝島、時重、首藤、田中教授と同期で大学教授の人物と一般の評があった位で卒業生の御世話もよくして下さった両恩師の高恩は今日尚片時も忘ることは出来ません。尚当時の宮崎政之助、安藤半平、清水莊太郎諸先生の高恩を忘れません。……（後略）<sup>17</sup>（下線は筆者による）

学恩というより就職の世話への恩というべきであろうか。小島は札幌農学校卒業後、大阪府立農学校校長を経て、1900年4月に大分県農学校長に就任し、14年の長きに渡り学校発展に尽くした。

『韓国の農業』（金港堂、1905年）という著作もある。正確に言えば小島喜作は札幌農学校1882年卒業であり、新渡戸稲造（1881年卒業）、横山壮次郎（殖産局農商課長であった、1889年卒業）、藤根吉春（1889年卒業）と同期生ではない。とはいえ新渡戸とは1期違いであり、横山と藤根はそれぞれ新渡戸の下で活躍したので小島とも関係があったという意味に理解しておけば良いであろう。そしてそれらの人間関係を使って、小島校長は卒業生を台湾へと送り、その卒業生の業績が良かったので後の卒業生も継続して台湾で採用されたという話である。ただし小島だけが活躍し

<sup>15</sup> 小山三平「思い出のまま」（大分県立三重農業高等学校『創立90周年記念』、同校、1983年、13-14頁）。

<sup>16</sup> 「願ニ依リ本職ヲ免ス（2月25日内閣） 大分県立農学校教諭 生駒藤太郎」（『官報』第8001号、1910年2月26日、「叙任及辞令」）。

<sup>17</sup> 小野新市（1900年獣医科卒）「昔を偲び、今を憶う」（『大分県立三重農業高校 創立70周年記念誌』）。この記事は「就職について」でも引用しているが再掲する。

たのでなく、駒場農学校出身の生駒が、やはり駒場の同窓関係を利用して台湾へ卒業生を紹介していたのも興味深い。また生駒は以下のような著作を残しており<sup>18</sup>、同時代の獣医学の大家であった。

- |                        |                       |
|------------------------|-----------------------|
| 『寄生虫学』（有隣堂、1895年）      | 『獣医学教科書』（有隣堂、1903年）   |
| 『家畜病理通論』（有隣堂、1903年）    | 『家畜発生学』（有隣堂、1905年）    |
| 『養畜之栞』（有隣堂、1906年）      | 『家畜衛生学教科書』（有隣堂、1908年） |
| 『獣医新薬並新治療法』（有隣堂、1911年） |                       |

小島や生駒以外の教員も、著書こそ無いものの学歴等は高かった。校長について言えば、平田幸次郎（初代校長）は1888年、加賀山辰四郎（第2代校長）は1892年、掛飛作太郎（第5代校長）は1906年、檜林林二郎（第6代校長）は1901年、石田彰（第7代校長）は1906年、奥田準一（第9代校長）は1921年に、それぞれ東京帝国大学農学部（もしくはその前身校）を卒業している<sup>19</sup>。校長以外にも、東京帝国大学農学部卒業後に教諭で赴任したものが少なくない。教諭では札幌農学校卒業者も赴任している。篠崎真秀は1898年に札幌農学校を卒業し、本校から大分県立日田農林学校校長へと転じた。黒沢良平は1896年に、高野定治と中目敬治は1900年に、高村俊治は1904年に、柳田玄俊は1905年に、関司は1906年に、それぞれ札幌農学校を卒業している<sup>20</sup>。当時の中等教育機関としては十二分な学識を備えた複数の教員が在籍しており、小山三平の批判はあるものの、しっかりとした教育が期待される学校であった。

## 2. 大分県農学校の卒業生と植民地

大分県農学校の卒業生については、三重農学校時代の『大分県立三重農学校卒業生名簿』が、1926年2月、1930年12月、1937年7月の3冊ほど、大分県立図書館に所蔵されている<sup>21</sup>。1926年版は卒業生の本籍がある（大分県の）郡別に大別した後で卒業年度順に並べられている<sup>22</sup>。1930年版は卒業年度・学科別に大別した後で卒業成績順に並べられている<sup>23</sup>。1937年版は卒業年度・学科別に大別した後、順序不同として並べられている。ただし1930年版と実際の並びは変わらない。

<sup>18</sup> 「国立国会図書館サーチ」にて「生駒藤太郎」で検索した結果である。URLは以下である。なおこれらは「国立国会図書館デジタルコレクション」で閲覧可能である。

[http://iss.ndl.go.jp/books?any=%E7%94%9F%E9%A7%92%E8%97%A4%E5%A4%AA%E9%83%8E&op\\_id=1](http://iss.ndl.go.jp/books?any=%E7%94%9F%E9%A7%92%E8%97%A4%E5%A4%AA%E9%83%8E&op_id=1)

<sup>19</sup> 校長は『大分県立三重農業高校 創立70周年記念誌』による。東京帝国大学農学部の卒業年は、農学会『農学会会員名簿』（大正11（1921）年10月末日現在、同会編）による。この農学会名簿は筆者所蔵。

<sup>20</sup> 黒沢・篠崎・高野・中目・高村・柳田・関については、『三重農学校同窓会員名簿』1937年版の「旧職員」（1-11頁）と『札幌農学校同窓会報告』（後に『札幌同窓会報告』）各年度所収の名簿を突き合せた。この名簿群も筆者所蔵。

<sup>21</sup> 1937年版の名称は『三重農学校同窓会員名簿』。

<sup>22</sup> 郡毎に同窓会の世話係がいらしい。1926年版は係の情報収集力の良し悪しによってデータにむらがある。特に大野郡の1920年卒業生（23頁）と1924年の別科卒業生（27頁）、日田郡の卒業生ほぼ全て（32-33頁）の「現住所及職業」欄が空白になっている。

<sup>23</sup> 注2で紹介した『校友会雑誌』第18号は、「母校便り」にて、1915年3月30日に举行された「第23回卒業証書授与式」（145-147頁）と、1916年3月21日に举行された「第24回卒業証書授与式」（147-148頁）を掲載している。そこでの卒業生はそれぞれ「品行方正学術実習優等」受賞者を先頭に、「学術優等」受賞者を次に記載しており、卒業成績順と判断することができる。この卒業生の並び方と1930年版『三重農学校卒業生名簿』の1915年、1916年の卒業生の並び方は同一である。

本論は時間的制約もあり、1930 年版について卒業生の「現住所又ハ奉職先」の整理を試みた。ただし卒業後しばらくの職探しや徴兵（平時はほぼ甲種合格者のみの選抜徴兵）による離職（と職業・居住地域の変動）を考慮し、1925 年までの卒業生に限って（さらに本科に限り集計し、教育程度が簡易な別科は除いて）、卒業年・学科別に、現住所を大分県・九州他県・本州四国北海道・台湾・朝鮮・関東州と満洲（すなわち中国東北部）・その他・死亡・不明に整理した（死亡は住所ではないが便宜上入れた）。その結果を、1913 年卒業生（水産科最後の卒業生が出た年）までを表 1、1914 年から 1925 年までの卒業生（及び 1895 年～1925 年までの総合計）を表 2 にまとめた。

表 1 大分県農学校卒業生（1913 年まで）の地域別進路（学科・卒業年別の人数、1930 年現在）

卒業年	学科	大分県内	九州他県	本州四国北海道	台湾	朝鮮	関東州・満洲	その他	死亡	不明	合計
1895	獣医	15	1	2	1	1	0	0	4	0	24
1896	農	6	0	0	0	1	0	0	2	2	11
1896	獣医	5	0	0	0	0	0	0	2	0	7
1896	水産	4	0	1	1	0	0	0	1	0	7
1897	農	5	0	0	0	1	0	0	4	0	10
1897	獣医	6	0	2	0	0	0	0	2	0	10
1897	水産	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2
1898	農	3	1	1	0	0	0	0	2	3	10
1898	獣医	4	2	2	1	1	0	0	4	3	17
1898	水産	2	0	0	0	0	0	0	3	1	6
1899	農	3	1	0	0	0	0	0	4	1	9
1899	獣医	16	1	1	0	0	1	0	4	5	28
1899	水産	3	1	1	0	0	0	0	1	0	6
1900	農	8	0	0	1	0	0	0	4	0	13
1900	獣医	4	0	2	2	1	0	0	1	4	14
1900	水産	2	0	0	1	0	0	0	0	1	4
1901	農	6	2	1	0	0	0	0	4	0	13
1901	獣医	7	10	1	0	0	0	0	4	3	25
1901	水産	0	0	1	0	0	0	0	2	0	3
1902	農	8	2	0	0	1	0	0	1	0	12
1902	獣医	11	3	0	2	0	0	0	4	1	21
1902	水産	2	1	0	1	0	0	0	0	0	4
1903	農	14	3	1	6	2	0	0	3	1	30
1903	獣医	13	3	1	0	2	0	0	2	0	21
1903	水産	0	1	0	0	1	0	0	0	1	3
1904	農	11	3	1	3	0	0	0	5	1	24
1904	獣医	3	4	2	1	1	0	0	4	3	18
1904	水産	0	0	0	1	0	1	0	1	0	3
1905	農	12	2	1	2	0	0	1	4	0	22
1905	獣医	6	6	0	1	0	0	0	1	2	16
1905	水産	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
1906	農	11	0	1	5	3	0	0	3	3	26
1906	獣医	4	8	1	0	0	0	0	2	2	17
1906	水産	1	0	0	0	0	1	1	1	1	5
1907	農	11	2	1	1	1	0	0	7	2	25
1907	獣医	3	7	2	2	1	0	0	2	0	17
1907	水産	3	0	0	0	1	0	0	0	0	4
1908	農	17	2	1	5	0	1	0	2	2	30
1908	獣医	8	5	4	0	0	0	0	0	1	18
1908	水産	0	2	0	0	2	0	0	0	2	6
1909	農	17	1	4	5	3	0	0	3	0	33
1909	獣医	7	4	0	0	1	1	0	8	1	22
1909	水産	5	1	1	1	1	0	0	3	0	12
1910	農	20	1	0	2	3	0	0	4	3	33
1910	獣医	8	2	4	1	1	0	0	6	4	26
1910	水産	3	1	1	0	2	0	0	0	0	7
1911	農	20	0	0	3	3	1	0	2	2	31
1911	獣医	12	1	0	2	2	0	0	3	0	20
1911	水産	2	2	0	0	0	0	0	0	0	4
1912	農	10	0	1	5	4	0	1	6	2	29
1912	獣医	5	4	0	1	1	1	0	2	2	16
1912	水産	3	2	0	0	1	0	0	1	2	9
1913	農	21	1	3	2	0	1	0	0	2	30
1913	獣医	10	4	5	1	2	0	0	1	3	26
1913	水産	7	1	2	0	0	0	0	0	3	13
学科別合計	農	203	21	16	40	22	3	2	60	24	391
	獣医	147	65	29	15	14	3	0	56	34	363
	水産	39	12	7	5	8	2	1	14	12	100
総計		389	98	52	60	44	8	3	130	70	854



表2 大分県農学校卒業生(1914年から1925年まで)の地域別進路(学科・卒業年別の人数、1930年現在)

卒業年	学科	大分県内	九州他県	本州四国北海道	台湾	朝鮮	関東州・満洲	その他	死亡	不明	合計
1914	農	10	1	1	2	4	0	2	2	5	27
1914	獣医	6	5	3	1	2	0	0	2	0	19
1915	農	21	0	1	1	4	0	0	4	4	35
1915	獣医	10	4	2	1	2	0	0	0	0	19
1916	農	20	3	3	0	3	0	0	3	6	38
1916	畜産	8	2	1	0	1	0	0	1	2	15
1917	農	15	2	2	1	5	0	0	3	3	31
1917	畜産	10	6	3	0	3	0	0	1	5	28
1918	農	21	1	3	0	1	0	0	1	10	37
1918	畜産	5	4	3	0	1	0	0	1	2	16
1919	農	26	2	1	2	2	0	0	4	3	40
1919	畜産	8	5	4	0	2	0	0	1	0	20
1920	農	12	1	4	2	2	0	1	7	2	31
1920	畜産	6	3	5	1	3	1	0	3	1	23
1921	農	26	2	2	3	0	0	0	4	1	38
1921	畜産	10	1	3	1	0	2	0	0	3	20
1922	農	26	2	2	2	1	0	1	1	4	39
1922	畜産	9	3	5	1	2	0	0	1	1	22
1923	農	21	1	2	0	3	0	1	1	1	30
1923	畜産	19	3	1	1	3	0	0	0	2	29
1924	農	22	4	3	1	1	0	0	2	6	39
1924	畜産	8	3	3	0	1	1	0	1	1	18
1925	農	27	1	5	1	0	0	0	0	1	35
1925	畜産	11	4	6	0	1	1	0	0	1	24
学科別	農	247	20	29	15	26	0	5	32	46	420
合計	畜産	110	43	39	6	21	5	0	11	18	253
総計		357	63	68	21	47	5	5	43	64	673
1895年～	農	450	41	45	55	48	3	7	92	70	811
1925年の	獣医+畜産	257	108	68	21	35	8	0	67	52	616
総合計	水産	39	12	7	5	8	2	1	14	12	100
	総合計	746	161	120	81	91	13	8	173	134	1527

表1・表2からわかることが幾つかある。もちろん大分県立の学校であるので、卒業生の過半は大分県に居住している。伝統ある農学校かつ獣医師免許の魅力のため、隣接する九州各県からの進学者も少なくなく、その多数が出身県に戻るのも不思議ではない。本論が注目するのは台湾・朝鮮・関東州および満洲へ、卒業生がどう移動しているかである。

表1(1895年～1913年)では台湾に居住する卒業生が少なくない。小島(第4代校長)赴任前は若干名である(かつ彼らが卒業と同時に台湾へ赴いたかどうかは定かでない)が、1902年から増加する。1903年は農科卒業生30名中6名が(1930年時点においてではあるが)台湾に居住し

ている。1906 年も農科卒業生 26 名中 5 名、1908 年も農科卒業生 30 名中 5 名、1909 年も農科卒業生 33 名中 5 名が、1912 年も農科卒業生 29 名中 5 名が、それぞれ台湾に居住している。言い換えると大分県農学校卒業から 25 年程度たった時期において農科卒業生の 2 割近くが台湾に住んでいる。獣医科・水産科からも農科ほどではないが、台湾居住者がおり 3 科合計して 60 名となっている（表 1 の卒業生総数 854 名を分母とすれば、7%となる）。一方、表 1 において朝鮮に居住する卒業生は、台湾ほど多くない。1905 年 11 月の第二次日韓協約締結（これで大韓帝国は日本の保護国となり、初代統監として伊藤博文が赴任した）以降は増加傾向にあるものの合計 44 名に留まる（同じく 854 名を分母として、5.1%）。関東州・満洲は 1%程度に過ぎず、無視できる。

表 2（1914 年～1925 年）では、朝鮮居住者が台湾居住者を上回る。表 1 の台湾居住者ほどの高比率ではないが、1921 年と 1925 年を除いて農科と畜産科からそれぞれ居住者が 1 名以上出ており、合計 47 名となっている（表 2 の卒業生総数 673 名を分母とすれば、7%となる）。

1910 年代在校生たちの朝鮮への関心は高い。大分県立農学校校友会『校友会雑誌』第 18 号（1917 年 6 月 20 日発行）を筆者は入手している。同号目次によれば、研究発表を行う「論説」、文芸記事や批評を載せる「文苑」、各地に居住する卒業生からの「通信」、そして「雑録」および彙報というべき「母校便り」が掲載されており、教員を意味する「客員」、卒業生を意味する「賛助員」、そして在校生（目次では学科と学年を略して、農科 3 年生なら農三、畜産科 1 年生なら畜一、と記載）がそれぞれ投稿している。その「雑録」の「修学旅行記」は、同校初の海外修学旅行として、朝鮮修学旅行の記述を載せている（106-134 頁）。この旅行では、1917 年 5 月 12 日から 22 日まで 11 日間、教員 2 名と学生 45 名（農科 30 名、畜産科 15 名）が朝鮮半島中南部を巡回した<sup>24</sup>。「雑録」では続けて参加者がそれぞれ朝鮮視察報告を行っている。とはいえ、台湾居住者は減っているが両科ともゼロになったのは 1916 年と 1918 年だけであり、合計 21 名を維持している（同じく 673 名を分母として、3.1%）。関東州・満洲は今期も 1%を下回り、無視できる。

表 1 と表 2 を合計すれば、朝鮮居住者が 91 名で、卒業生総数 1527 名を分母とすれば 6%、台湾居住者が 81 名で、同じく 1527 名を分母として 5.3%となる。

さて今まで 1930 年名簿から大分県農学校卒業生中の植民地居住者を論じてきたが、この論法には欠点がある。卒業生が卒業後まもなく（もしくは数年のうちに）台湾へ赴任してそのまま定着し

<sup>24</sup> 行程は以下の通りであった。

5 月 12 日 亀川（学校最寄り駅）出発、下関から船で釜山へ  
5 月 13 日 釜山上陸、鉄道で京城へ  
5 月 14 日 京城見学（総督府、昌徳宮、博物館、中央試験場等）  
5 月 15 日 永登浦皮革会社と仁川港見学  
5 月 16 日 総督府商品陳列場見学、夜行列車で平壤へ  
5 月 17 日 平壤見学（平安南道種苗場、公立農業学校等）  
5 月 18 日 平壤から鉄道で水原へ、途中に海城で下車して海城参業組合視察  
5 月 19 日 水原見学（原蚕種製造所、高等農林学校、勸業模範場等）、夜行列車で大邱へ  
5 月 20 日 大邱見学（種苗場、農学校等）、鉄道で釜山へ  
5 月 21 日 釜山見学（牛疫血清製造所等）、船で下関へ  
5 月 22 日 下関上陸、門司から鉄道で亀川へ移動して解散

たのか、それとも1930年に近づいてから台湾へと移動したのか、1930年名簿だけではわからない。その前の1926年名簿も利用しても、卒業から約20年の空白期間が残る。卒業生が『台湾総督府職員録』に載るものばかりであれば、中央研究院台湾史研究所の「台湾総督府職員録系統」で検索すればわかるかも知れない。しかし民間人にこの手は通用しない。どうすれば空白期間を縮め、台湾に定着した卒業生数を推測できるだろうか。

上述の『校友会雑誌』第18号の「通信」には「台湾支部より」という記事があり、1918年1月1日現在の「台湾支部名簿」が付属している(92-95頁)。客員3名(中目敬治、石川寛、立川智花、すなわち旧教員)に続き、賛助員83名(英領北ボルネオ在住者1名を含む)の「科別」「原籍」「現住所」「姓名」が、北から台湾西部を南へ縦貫後に花蓮港と台東という順番で掲載されている。この「台湾支部名簿」の賛助員(卒業生)83名について、『大分県立三重農学校卒業生名簿』1930年版を突き合わせ「台湾支部名簿」には掲載されていない卒業年を加筆するとともに、その83名が1930年版ではどこに居住しているかを加筆し、さらに「台湾総督府職員録系統」とも突き合わせて勤務先不明者の1918(大正7)年の勤務先を割り出したのが、表3である。

表3 大分県農学校校友会台湾支部員の勤務先と1930年の動向

姓名	科別・卒業年	1918年1月1日現在の勤務先	1930年卒業生名簿での動向
小野 新市	獣1900	総督府農事試験場	在台
長野 小熊	水1902	台北庁基隆内地移出石花菜検察所	大分に戻る
杉尾 喜高	水1904	殖産局商工課	在台
伊藤 鶴馬	獣1900	殖産局血清作業所	大分に戻る
安倍 輝吉	農1908	総督府農事試験場	在台
佐土原 喜熊	獣1911	総督府農事試験場	在台
森田 伊勢馬	獣1911	民間	大分に戻る
川越 順市	水1909	総督府専売局	在台
中島 隆吾	農1908	総督府専売局	在台(中島隆吉とも記す)
大谷 銀造	水1900	台北庁庶務課	在台
矢部 作生	農1915	総督府専売局煙草課	大分に戻る
馬淵 雄城	獣1915	基隆駅伝社	高知(出身地)に戻る
藤島 保夫	農1916	総督府専売局煙草工場	不明
御竿 信吉	農1913	総督府専売局煙草製造課	在台
重栖 健	農1900	宜蘭庁埤圳組合	在台
河津 乃夫	獣1904	宜蘭庁庶務課	大分に戻る
衛島 寿吉	農1906	新竹庁庶務課	在台
工藤 常男	農1908	宜蘭庁庶務課	在台
榎本 加賀治	農1909	宜蘭庁農会	在台
首藤 英彦	農1914	宜蘭庁農会	在台
但馬 近蔵	農1904	桃園庁庶務課	在台
古屋 鬼子夫	農1910	桃園庁農会	在台
宮崎 定男	農1912	桃園庁安平鎮鈴木農場	在台
深井 喜三郎	獣1896	新竹庁警務課	大分に戻る
大庭 半次	獣1902	新竹庁農会	死亡(大庭半治?)
赤嶺 明	農1909	民間	在台
遠藤 彦太	農1906	新竹庁農会	在台
林 清治	農1913	民間	在台
能丸 宇吉	獣1912	民間	大分に戻る
安部 実	獣1905	民間	大分に戻る(安部茂?)

上野 泰	獣 1902	台中庁庶務課	在台
豊田 俊五郎	農 1903	台中庁庶務課	在台
武生 玉蔵	農 1903	台中庁庶務課	在台
村上 彦治	獣 1904	台中庁農会試験場	在台
平川 一彦	農 1907	民間	在台
古寺 堯喜	農 1908	台中庁農会育種場	在台
長野 与吉	農 1909	民間	在台（1934 年から新営郡新営街長）
釘宮 実	農 1906	新高製糖株式会社員林駐在所	在台
宗 朔生	獣 1911	民間	在台
工藤 吾郎	獣 1910	台中庁農会試験場	在台
木永 仁	農 1903	台中庁農会試験場	在台
志賀 吾市	農 1912	台中庁烏日検米所	大分に戻る
荒金 軍平	農 1917	台中庁農会育種場	大分に戻る
横矢 秀雄	農 1909	民間	在台（片峯秀夫に改名）
相良 貞二	農 1901	南投庁農会	大分に戻る（相良貞次？）
帯刀 栄人	農 1911	南投庁林杞埔公学校	在台
那須 富蔵	獣 1900	民間	在台
佐藤 貞芳	農 1904	民間	死亡
堀 茂	農 1905	民間	在台
石井 由人	農 1906	嘉義庁農会	東京へ（佐藤由人に改名）
阿部 庫喜	農 1907	民間	大分に戻る
宮本 正治	農 1909	民間	在台
児玉 庵	農 1911	嘉義庁庶務課	在台
赤嶺 巻	農 1909	嘉義庁農会	在台（赤嶺明？）
三代 杉造	獣 1912	嘉義庁蓄牛保健組合	在台
岡本 賢市	水 1896	嘉義庁布袋嘴専売支局	在台
井沢 伝吉	獣 1898	台南庁警務課	在台
曾根 茂夫	水 1902	打狗山一商行支店	在台
藤野 藤吉	農 1914	台南庁庶務課	在朝鮮
檜橋 正	獣 1915	民間	在朝鮮
脇 克明	農 1916	台南大目降糖業試験場	大分に戻る
渡邊 和一	農 1914	台南大目降糖業試験場	大分に戻る
吉野 新市	農 1904	台湾製糖会社下冷水坑農場	在台
小野 嘉	農 1911	殖産局糖務課（阿緬庁六塊厝甘蕉苗圃）	在台
森次 与	農 1903	阿緬庁庶務課	在台
武石 清次	農 1904	殖産局糖務課	在台
清水 慎市	農 1904	恒春種畜場	大分に戻る
永吉 悟	農 1905	阿緬庁庶務課	在台
麻生 春作	農 1908	阿緬庁庶務課	大分に戻る（旧姓、日小田）
高橋 茂夫	農 1908	阿緬庁農会	在台
渡邊 光夫	農 1906	阿緬庁農会	在台（工藤光夫）
平野 雛人	獣 1915	阿緬庁血清作業所	在台
清水 利彦	農 1917	阿緬庁蕃薯寮街塩水港製糖会社	在台
齋藤 万助	農 1912	阿緬庁台湾製糖崇蘭農場	在台
山口 次人	農 1906	花蓮港庁吉野村移民指導所	在台
山之内 実治	獣 1907	民間	在台
諸富 堺	農 1910	花蓮港庁豊田村移民指導所	大分に戻る
佐藤 豊作	獣 1895	花蓮港庁卑南台東製糖会社	在台
篠田 主	獣 1902	台東庁臨時防疫部	在台
田原 保馬	農 1905	台東庁農会	大分に戻る（田原安馬）
本田 正昭	獣 1913	民間	在台（本田正明？）
後藤 北面	農 1912	台東庁農会	在台
小原 一策	農 1903	英領北ボルネオ、タワオ、久原事業地	在台

表3からわかることは以下である。まず1918年の勤務先について。官吏が38名と多く、準官吏である農会・組合勤務者も19名いた。併せて57名となる。表3では省いたが彼らの待遇は技手や雇であり、技師に昇任した者はいない。末光仁でさえ産業技師として待遇されるのは1924年になってからである。大分県農学校卒業生の台湾における役割は、殖産局や庁庶務課など総督府の現場での中下級技術者であったことがよくわかる一覧である。とはいえ民間企業に勤務している者が少なくとも9名存在した。その中の5名は製糖企業勤務であり、83名を分母とすれば6%で無視できない数となる。他の17名は総督府職員録系統にも見当たらず他に手掛かりも無いためとりあえず民間として扱った（巡査や看守の可能性はある）者である。

次に1930年名簿で彼ら83名はどこにいるかについて。台湾が58名と圧倒的であった。大分に戻ったものも18名いたが、他は大分以外の郷里に戻ったもの1名、東京1名、朝鮮2名、死亡2名、不明1名といずれも無視できる。台湾から朝鮮へと移動したのは、1914年卒業と1915年卒業という若手に過ぎなかった。特に民間企業勤務者は9名中8名が台湾に残っていた。多くの卒業生が、中下級技術者として台湾に定着していたことがよくわかる。

話を整理しよう。1918年に大分県農学校卒業生は83名が台湾にいた。1930年までに25名が台湾から去ったが、1925年までの卒業生のうち新たに23名が台湾へと移り、1930年の大分県農学校卒業生（1925年卒業まで）は81名となった。つまりこの13年間に台湾に居住した大分県農学校卒業生（1925年卒業まで）は延106名であった。これに1926年以降の卒業生が加わったのが、実際の台湾居住者数である。「就職について」執筆時点では数字的裏付けが取れなかった小野新市「恩師の思い出」（本論第1章）で、小島校長が台湾に送った卒業生百数十名云々という話は、その後の歴代校長時期の卒業生を含めればであるが、数字的裏付けのある回顧であった。

### 3. 大分県農学校卒業生の台湾でのネットワーク

前章で示した通り、大分県農学校からは100名以上の卒業生が台湾へと渡り、その中の過半は台湾で定着しようとしていた。それほどまでに人数がいれば、校友会（すなわち同窓会）台湾支部というものが出来ても不思議ではない。では台湾支部の会員たちは、どのような同窓会活動、もしくは連携した活動をしていたのだろうか。

まず上述の「台湾支部より」を見てみよう。前章で分析した台湾支部名簿の他に、92頁に1917年後半の支部の活動内容が、以下の通り記載されている。

八月 志賀吾市君 九月 赤嶺明君、結婚に付祝詞並に金製鯉一個贈呈せり。

十一月十日 台北ライオンに於て、釘宮実君新高製糖会社に栄転の送別会を開く、参会するもの伊藤、大谷、川越、中島、矢部、安部、佐々木、小野の諸君なりき。

十一月二十三日 台中於多福亭に於て同窓会を開く、会するもの豊田、上野、長野、宗、村

上、工藤、武生、安部、末永、吉寺、荒金、釘宮、三代、能丸、小野、伊藤、深井、大庭、の諸君にして、臼杵亀川時代の懐旧談をなし、各自十二分の歓を尽し午前一時散会せり。

十一月九日 塩水港支庁宮本正治君、福岡県人安藤常世子嬢と結婚したるに付、御祝として金鯉一個贈呈せし由

十一月二十八日 台東庁工藤五郎八君悪性マラリア症にて死亡に付、弔電並に香典金五円贈呈せりと。

十二月十一日 桃園庁古屋鬼子夫君森次氏令妹と結婚に付祝詞せりと。

これだけだと、午前1時まで飲み過ぎの嫌いはあるものの、普通の同窓会に過ぎない。ただこれだけでは無かったことを、甲斐登が回想「蓬莱米」で証言している。長いが引用しよう。

### 台湾の米を根本的に改革した同窓生

母校の輝かしい創立70周年記念式典が挙行せられるに当り、我三重農業の同窓生大先輩である9回末永仁氏、同期豊田俊五郎氏、28回薮亀孟男君の心血を注いだ、台湾の米を根本的に改良した。「蓬莱米」について書留め、新しい同窓生諸君に知っていただくと同時に、先輩に続き不滅の金字塔を打立てられる後輩諸君の続出を熱望し拙文を敢てする次第である。

私が台湾に渡ったのは卒業と同時で、学校から推薦され台中州立農事試験場に育種部見習生としてであった。当時の場長は、蓬莱米生みの親として知られる磯永吉博士であったが、氏は丁度欧米旅行中で帰台されたのは2年後の大正11（1922）年で、其の間場長代理は我等の先輩、明治36（1903）年第9回農科卒、福岡県出身の末永仁氏であった。私は同先輩より遺伝学の講義、交配育種の技術教育を受けた。そこで総督府でも各地、農事試験場に命じて美味しい内地米の試験栽培を何年間もやらせ研究させたが、結局収量僅少で成功せず、どの様に頑張っても台湾での内地米栽培は不可能と考えられていたのが当時の要路当局者の一般的考方であった。従って総督府の主任技師であった長崎氏など台湾で内地米栽培を口にするような技術者は台湾に置く訳にいかんとまで云っていた。……（中略）……外遊中の磯場長が帰台されると同時に総督府殖産局に転任され後任には先輩、末永仁氏が農事試験場長に就任された。丁度其の頃2期後輩の直入郡出身の薮亀孟男君が入場した。同君は非常に研究熱心で不言実行型の熱血漢であったが先輩末永場長のもと新たに良友薮亀君を得て内密ながら内地米栽培の研究層一層の拍車をかけた。勿論研究活動は表面に出ないよう慎重を期し、隠密裡に進められた。研究試験、失敗と繰返し、当時陰に陽に庇護、助言して下さった総督府勸業課主任技師だった南部鶴岡出身の豊田先輩が命名された内地米中村種の私の任地台中州大甲郡での栽培は一応の成功を見たが……（中略）……

一方大正14（1925）年以来末永場長のもとで鋭意、新品種の作り出しに努力していた薮亀君が遂に昭和4（1929）年、日本種の神力を母とし、亀治を父とする台中65号の創製に成功した。この65号が数年にわたる試験の結果、非常に素晴らしいものであることがわかり、

愈々前記中村種に取って代り、郡内全般に普及奨励する段取になったが、この時も豊田先輩が“総督府に対する責任は豊田が負うから大いにやり給え”と激励された。……（後略）<sup>25</sup>

甲斐の証言の冒頭は、すでに小島校長は退任していたけれど、甲斐は学校からの推薦を得て、台湾に卒業後すぐ就職したことである。前節で台湾への就職がゼロにならなかった一端がこれだろうか。証言は続いて、末永（磯の転任後に、台中の農事試験場長になった）の下で、大分県農学校卒業者が団結して内密に内地米（ジャポニカ米）の台湾栽培方法について研究開発を進め、蓬莱米の名品種である「台中65号」を誕生させたことを語っている。すなわち、大分県卒業生たちの交流は、台湾総督府の米穀政策を大幅に変えるところまで影響したのであった。

## おわりに

大分県農学校は、本論第1章が示す通り、大分県のみならず九州でも有数の中等農業学校であったが、教諭にも学歴の高い人が多く、政争のごたごたにも関わらず、大分へそして台湾や朝鮮へと農業人材を送り出し続けていた。

本論第2章で示す通り、大分県農学校は各年度の卒業生を台湾へと送り出していた。送り出し先は台湾総督府とその関係機関だけでなく民間企業にも及んでおり、日本統治期台湾の農業分野における中下級技術者層の重要な供給源の一つとなっていた。その過半は1930年になっても台湾に留まり、長期間の技術指導等を行っていた。

台湾在住の大分県農学校卒業生同士の関係は、資料不足のためわからないことが多く、今後の資料発掘に努めなければならない。とはいえ大正期の同窓会報から、台湾でも交流していた一端を見出すことができる。それは『大分県立三重農業高校 創立70周年記念誌』で後に回想される通り、単なる親睦ではなく、台湾農業へ大きな影響を当てる交流であった。

---

<sup>25</sup> 甲斐登（1920年農科卒）「蓬莱米」（『大分県立三重農業高校 創立70周年記念誌』）。この記事は「就職について」でも一部引用しているが、引用していない部分を大幅追加して掲載する。